

## ～オーケストラは子供を救う～ 青少年人材育成システム「エル・システマ」ファクトシート

**エル・システマ(EL SISTEMA)**は南米ベネズエラで33年前に青少年人材育成システムとして発足した。ベネズエラは豊かな石油資源を背景に近代化を推し進めた一方、同時にオーケストラというツールを使って青少年を将来ある豊かな人間に育成することを目指した。ベネズエラの音楽愛好家や音楽大学、このシステムに賛同したプロの世界的音楽家たちの支援と指導を受け、30余年の月日を経て高い水準で発達しその国挙げての試みは見事大成功。現在、欧米主要国各地でそのノウハウを自国や地域の社会状況に合わせ実現可能なプログラムに組み替える研究や取組みが既に進められている。

### 沿革

■設立は1975年、青少年グループがベネズエラの首都カラカス市街の地下駐車場スペースに集まり共にアンサンブルを演奏することからスタート。オルガン奏者、エンジニア、政治家でもあったアブレウ博士の先導により現在「エル・システマ」と呼ばれる青少年オーケストラ基金(FESNOJIV)の基盤となった。

■当時ベネズエラにあったオーケストラは2つ、クラシック音楽の聴衆は約1,000人と「エル・システマ」以前にはクラシック音楽に関する伝統も背景も薄いものだった。現在国内300となったオーケストラは、60以上の子供オーケストラ、約200のユース・オーケストラ、30のプロフェッショナル・オーケストラ、無数の合唱団を含み、各地126の拠点を持つ。

■過去30年で100万人の子供達(3歳から19歳)が「エル・システマ」に参加しており、平均所属年数は10年、現在のエル・システマ所属人数は約30万人、内ハンディキャップのある子供達を含み、聴覚障害の子供達のための合唱団もある。今後10年間で更に100万人に増大させるMISSION MUSICA政策がある。

■参加者の67%は貧困層から来ており、また、首都カラカスの殺人および銃による犯罪率が非戦争地帯では最も高い地域からやって来た少年院出の子供や孤児も含まれ、その彼らが現在高い演奏レベルでベートーベン、バルトーク、マーラーを演奏する。

■「エル・システマ」の選抜チームがシモン・ボリバル・ユース・オーケストラ(SBYO)であり、プレーヤーは15-25歳。SBYOの指導に当たりたいと、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の現首席指揮者兼芸術監督サイモン・ラトルや、カラヤンの後任でやはりベルリン・フィルの元芸術監督クラウディオ・アバドはじめ世界中の著名な音楽家達が、このオーケストラの発展に長年に渡り携わり、その後ろ楯となってきた。

■「エル・システマ」の卒業生であり、SBYO音楽監督兼指揮者グスターボ・ドゥダメルは、既にベルリン、ウィーン、ミラノ、ニューヨーク、シカゴの世界トップクラスのオーケストラを指揮しており、ロサンゼルス・フィルハーモニーの次期音楽監督就任が決まっている。またコントラバスのエリクソン・ルイズは2003年に最年少(17歳)でベルリン・フィルに入団し世界的に注目を集めた。その他にもヴァイオリンの楽器制作者としてイタリアのクレモナで活躍している卒業生や音楽関連以外の国際企業や組織で活躍している卒業生もいる。SBYOは世界的レコード会社、ドイツ・グラモフォンとも録音の契約を結んでいる。

■単なる国挙げてのソーシャルサービス・プログラムとしてだけではなく、膨大な数のリスクを持つ子供達の生活を向上させながら、また芸術や芸術家たちを資本として創出しながら時間をかけて発達してきた。

## 資金

全額ベネズエラ政府による助成により運営されている。現在はまだ文化庁からではなく社会福祉庁からの助成金となっている。システムの設立者でもあり政治家でもあるアブレウ博士の手腕により 30 年間に 5 回変わっているベネズエラ政権を通して削減されるどころか増資され続け、現在の年間予算は約 65 億円。チャベス大統領政権はシステムに所属する子供達を 10 年間で 100 万人に達成させる意向を発表している。

## 「エル・システム」のしくみ

### ■子供たちを財産にする「あなたは出来る」褒める人材育成システム

指揮者デュダメルという言葉：「このシステムは、子供達一人一人に自分が財産であると思えるような環境を作るところから始めている。なぜならば、このプログラムに参加する前はそう感じたことがない子供がほとんどだから。そして、いつもみんなが楽しむことを忘れないように気を配っている。」

■一週間のうち 6 日、放課後最大 4 時間にもおよび行われるアンサンブル練習の場は、完全に「ポジティブで快適な環境」になっており、恐怖、緊張、ストレスなどの要素は一切取り除かれている。上手く出来た時には大いに褒められるが、だからといって間違えた時に叱られることはない。演奏が充分でなくても指導者は決して「ダメ」や「無理」と言うことはなく、「あなた達は音楽を創れる」という様なポジティブなコメントが定期的に与えられ、常時ポジティブなフィードバックがある状態に保たれている。子供達もその親も強制されて活動に参加するのではなく、友達と一緒に楽しく無料で音楽を学べる場所、として自発的にプログラムに参加している。

■生徒達はこのような「ポジティブな環境」に長期間身を置くことにより、互いを尊重し信頼し合う社会性、グループプロセスに対する信頼、挑戦に立ち向かうための自信、自分の存在が認められているという充実感を得ることが出来る。

■2、3 歳からプログラムに参加することはできるが、通常楽器を始めるのは 5、6 歳。当初からアンサンブルの中に入り、グループに調和する経験や、音楽的な基礎能力となる音量、音程、強弱等の表現を自然に習得するため合唱に参加、と同時にリコーダーと打楽器を始める。その後、オーケストラで演奏する楽器を自分で選択する。一週間の練習日程は、①全体練習⇒②セクション練習（年長の生徒が年下を教える）⇒③プライベートレッスン（週 2 回）という順序で、毎週繰り返される。このシステムは日本の音楽教育に通常見られる様な 1 種類の楽器を黙々と練習し上達してからアンサンブルに入るのではなく、最初からアンサンブルの中で複数の楽器を学んでゆくことを目的としている。

■毎日の練習は一般に広く公開されており、近隣者や取材陣などが練習を傍観することも度々で、結果、他人の前で演奏する際に多くの人間を感じるプレッシャーや過度な緊張感に早い時期から慣れる、という効果につながっている。また、生徒に周囲が彼らと彼らが演奏する音楽に興味を持っていることを自然と感じさせ、生徒の自信と充実感につなげる事を目的としている。

■レベルの違うオーケストラが多くあるため、常に現在の自分より高いレベルの演奏に触れる機会を与えられており、生徒達が将来の自分の目標、成功をイメージ出来る様仕組まれている。

■プログラムに関わる指導者は全員が音楽家並びに社会活動家としてチーム開発、問題解決等の多面的能力を持ち合わせており、音楽指導面からだけでなく、青少年の人材育成全般に関する様々な側面から生徒を指導している。

## 「エル・システム」の社会的成果

■2007年度、米州開発銀行がこの「エル・システム」の事業規模拡大や施設建設（首都カラカスのコンサートホールと7カ所の練習拠点）のために150億円の融資を実行した。開発銀行は「エル・システム」を複数年にわたって追跡調査した結果、プログラム参加者たちの学業レベル、地域社会への参画度が大きく改善され、また、このプログラムが及ぼすコミュニティ全体への経済的波及効果が大変大きく、このシステムが地域社会変革の手段としても有効である、と証明されたとしている。また「エル・システム」の事業規模拡大は人材開発、市民道徳の向上、犯罪率の低下、将来の雇用機会の創出につながるとし、エル・システムへの1ドルの投資が1.68ドルの社会的便益をもたらすという結論に達している。

■2004年のロス・アンデス大学の調査によると、「エル・システム」の参加者の63%が学業においてGoodからExcellentの成績を達成している（「エル・システム」参加者以外では50%）。また参加者家族への調査によると、子供達の時間厳守、責任感、規律が改善されたという結果が出ている。

## 欧米での評価

■音楽教育事業の大国であるアメリカの専門家達が「エル・システム」について「ベネズエラは今世界で最も進んだクラシック音楽の育成システムを実践している」と評価している。SBYO公演の世界各地での成功や指揮者デュダメルはじめ「エル・システム」卒業生の世界的活躍により、そのしくみ自体が数年前より世界中で注目され始めている。欧米主要国では、「エル・システム」ノウハウを自国や地域の社会状況に合わせ実現可能なプログラムに組み替える研究や取組みが以下の通り各地で既に進められている。

1. ラテンアメリカ23ヶ国でエル・システムを音楽教育手法として既に導入している
2. 米国ロサンゼルスでは、エル・システムを参考にした市内40音楽団体を巻き込む「ユース・オーケストラLA」という独自プログラムを発足させている。加え、2007年度にはロサンゼルス市長がエル・システムをモデルとした「カリフォルニア・システム」の立ち上げについて記者発表している。
3. ボストン、ニューヨーク、クリーブランドでそれぞれエル・システムを元にした独自のユース・オーケストラ推進プログラムによる音楽教育メソッドの開発を進めている。
4. ドイツのウェストファーレン州をはじめ、スコットランド、イタリア、スペインなどのヨーロッパ諸国では、「エル・システム」パイロットプログラムを開始している。

■芸術やオーケストラ専門誌のみならず、世界各国から一般の新聞、テレビ、ラジオなどが社会的変革改善プログラムの成功例として多数現地取材に訪れている。（米国CBS局「60minutes」、ニューヨークタイムズ、など）

## 日本での評価

■アブレウ博士はユネスコ平和大使に任命されており、世界文化賞、旭日大綬章、ドイツ文化勲章などを受賞している。

■第166回国会、文部科学委員会(平成19年6月6日)の答弁において、地域社会の中で集団としてのルールを学ぶシステムとして、FESNOJIVが取り上げられた。伊吹大臣(当時)はこれを参考になる事例として受け止め、文部科学省としてどういうことができるかを考えたい、と発言した。

■NHKにおいても、FESNOJIVを取り上げた特集が放映された(2007年9月2日)ほか、教育テレビ「芸術劇場」でも指揮者グスターボ・ドゥダメルの活躍ぶりが報道され(2007年5月11日)、大きな反響を呼んだ。

■それ以外にも、以下のようにテレビ、新聞・雑誌、テレビなど様々なメディアで注目を集めている。

2001年1月21日 TBS CBSドキュメント「60minutes」

2006年1月10日 東京新聞(夕刊) コラム放射線

2007年3月13日 読売新聞(夕刊) コラム耳の渚

2007年10月7日 東京新聞 私説・論説室から「少年犯罪とオーケストラ」

2007年10月26日 東京新聞 洗筆

2008年1月2日・9日合併号 Newsweek 日本語版「南米の神童がクラシックを熱くする」

2008年7月5日 ジャパン・タイムズ「子供の生活の鍵を握る『エル・システマ』」

他に音楽の友、レコード芸術などの音楽誌にも掲載されている。

■ドゥダメルとシモン・ボリバル・ユース・オーケストラは世界的なレーベルであるドイツ・グラモフォンから以下のCD・DVDがリリースしている。

CD ベートーベン:交響曲第5番&第7番

CD マーラー:交響曲第5番

CD フィエスタ!(南米音楽集)

DVD プロミス・オブ・ミュージック(2007年ボン・ベートーベン・フェスティバルのドキュメンタリー、ライブ映像)

CD チャイコフスキー:交響曲第5番、幻想曲《フランチェスカ・ダ・リミニ》

■2008年12月には山田真一『エル・システマ——音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』が教育評論社より出版される。

## 出典

- 「今ヴェールを脱ぐ、シモン・ボリバル・ユースオーケストラ」山田真一 音楽の友 8月号
- “A Visit to Venezuela” Eric Booth, Chamber Music America VOL.25, NO.5 September /October 2008
- “El Sistema on the Launching Pad” Shirley Apthorp, Musical America Sept 26, 2008
- “Amid Despair in a Venezuelan Prison, Strains of Hope from a Music Program” Simon Romero, The New York Times, June 23, 2008
- “Conductor of the People” Arthur Lubow, The New York Times, October 28, 2007
- “IDB approves US \$150 million to support youth orchestras in Venezuela” Inter American Development Bank, press release June 6, 2007
- “ Reports from the Center for Psychological Research of University of Los Andes “ 2004